

## チャラカ・サンヒターのプラーナ説 — シャンカラ説との比較研究 —

長 友 泰 潤

(哲学研究室)

(2008年1月29日受理)

### On the theory of Prāṇa in Carakasamhitā

Taijun NAGATOMO

*Laboratory of Philosophy, Minamikyusyu University,*

*Takanabe, Miyazaki 884-0003, Japan*

(Accepted : January 29, 2008)

#### Summary

In the view of Carakasamhitā (CS), Vāta (or vāyu) consists prāṇa, udāna, samāna, apāṇa and vyāna. And it brings the object perceived by the five sense organs and manas to the ātman. So internal organs like the manas and buddhi, have in common the function vāyu. The internal organs are connected to the five sense organs by this function. And the prāṇa plays an important role in the maintenance of the body and all the sense organs. It is conducive to good health, improvement of strength and complexion, luster, growth, attainment of knowledge and longevity. Outside the body, it brings about compactness and movement in the sun, moon, stars and planet, and it sustains the earth.

In the theory of the Śāṅkarabhāṣya (SBh), Śāṅkara's commentary on Brahmasūtra, vāyu comes into the Self and divides into five parts, each of which has a special quality. These parts are sometimes individually called prāṇa, apāṇa, etc depending on their organic function but sometimes 'prāṇa' is used as a general term for all five parts. And these five vāyu aren't the function of the internal organs like manas and buddhi. When prāṇa goes out of the Self, the body and all the sense organs become weak. Therefore, Prāṇa plays an important role in the maintenance of the Self.

According to the above investigation, it can be maintained that there is some difference between the view of prāṇa in the SBh and the view presented in the CS. In the CS, prāṇa is the common function between the internal organs like the manas and buddhi, and connects these internal organs to the five sense organs, but in the view of SBh, prāṇa aren't the function of the internal organs. Therefore, in the view of the SBh, these internal organs can't connect to the five sense organs, if they don't themselves have this function.

Key words : manas, Śāṅkarabhāṣya, prāṇa, Carakasamhitā.

#### 序 論

インド古典医学論書の一つであるチャラカ・サンヒターには、プラーナについてのいくつかの言及が見られる。本稿ではその内容を吟味しながら、既に、マナス説との関連で検討した、シャンカラのプラーナ

説<sup>1)</sup>との比較考察を通して、チャラカ・サンヒターの医学書としての独自性を明らかにし、プラナーナの役割について、さらに詳細に検討していきたい。

## 1. チャラカ・サンヒターのプラナーナ説

チャラカ・サンヒターでは、プラナーナについて次のような言及が見られる。

「あなたの言うとおりに、それらこそヴァータを増大させたり、鎮静したりするものだ。では固形性も安定性もないこのヴァータに、いかにして増加作用あるいは鎮静作用をもつものが、接近せず、増加させたり鎮静させたりするのか、それを私が説明しよう。乾燥・軽さ・冷たさ・激しさ・清さ・荒さ・空洞性をもたらすものは身体のヴァータを増加させる。そのような状態になった身体中に依り所を得たヴァータは、いっそう増加して、不調に至る。一方、湿り・重さ・温かさ・滑らかさ・軟かさ・密集性をもたらすものは、身体のヴァータを減少させる。そのような状態になった身体中では、ヴァータは固着することなく、動き回って鎮静に達する。」

evametadyathā bhagavānāha, etānyeva  
vātaprakopaprasāmanāni bhavanti/  
yathā hyenamasaṅghātamanavasthitam  
anāsādyā prakopaṇa-prasāmanāni  
prakopayanti prasāmayanti vā; tathā  
anuvyākhyāsyāmaḥ-vātaprakopaṇāni  
khalu rūkṣaḥlaghuśītaḍārūṇakharaviśadśuṣi  
rakarāṇi śārīrāṇāṃ, tathāvidheṣu śārīreṣu  
vāyurāśrayaṃ gatvā apyāyamaṇaḥ  
prakopamāpadyate vātprasāmanāni punaḥ  
snigdhaḡurūṣṇaślakṣṇamṛdupicchilaghana-  
karāṇi śārīrāṇāṃ, tathāvidheṣu śārīreṣu  
vāyurasajyamānaścāran prasāntimāpadyate  
//7//<sup>2)</sup>

ここではヴァータ、すなわち風について述べられている。ここでは身体中のヴァータがいかにして増大したり、鎮静したりするかについて述べられている。それによると、ヴァータは、乾燥・軽さ・冷たさ・激しさ・清さ・荒さ・空洞性をもたらすものによって増大し、湿り・重さ・温かさ・滑らかさ・軟かさ・密集性をもたらすものによって減少する。ヴァータは身体中で、増加したり減少したりするものと考えられていたようである。

次に、風と身体との関係についての次のように述べられている。

「〔ヴァーユ〕は、正常な状態にあるときには、身体の組織（身体という機械）を保持するものであり、プラナーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナ〔の五種〕よりなり、様々な運動〔作用〕を促進させ、マナスを制御し導き、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を〔主体の方へ〕運ぶものであり、身体のすべての組織を統合するものであり、身体〔各部位の〕結合をもたらすものであり、言葉を発せしむるものであり、接触と音の本源であり、聴覚と触覚の根本であり、歓喜と活力との母胎であり、火を煽るものであり、病素を潤渇させ、分泌物を体外へ排泄させ、大小の脈管の通りをよくし、胎児の形成にあずかり、生命の持続の因である。」

vāyustantrayantradharaḥ praṇodānasamānav  
yānāpānātmā, pravartakaśceṣṭhānām uccāva-  
cānāṃ, niyantā praṇetā ca manasaḥ, sarvendri-  
yāṇāmudyojakaḥ sarvendriyārthānām  
abhivodhā, sarvaśārīra-dhātuvyūhakaḥ,

sandhānakaṛaḥ śārīrasya, pravartako vācaḥ  
 prakṛtiḥ sparśasābdayoḥ śrotrasparśanayor  
 malaḥ harṣotsāhayor yoniḥ, samīraṇo agneḥ  
 doṣasaṃśoṣaṇaḥ kṣeptā bahirmalānām,  
 sthūlānusrotasām bhattā, kartā  
 garbhākṛtīnām, āyūṣo anuvṛtti-  
 pratyayabhūto bhavatyakupitaḥ/ <sup>3)</sup>

ここでは、ヴァータではなくヴァーユが使われているが、どちらも風を意味する。この風とはプラーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナの五種からなり、身体を保持すものとされる。そして、この風が正常な状態にある場合について述べられている。すなわち、風はマナスを制御し、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体の方へ運ぶものでもある。さらに、風は身体の組織の様々な機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命持続の原因とされている。

次に、風が正常ではなく、激化した状態にある場合について述べられている。

「風は身体内で激化すると、身体を様々な病気で苦しめ、体力・容色・健康・寿命を破壊し、マナスを混乱させ、すべての感官を阻害し、胎児を殺したり、奇形を生ぜしめたり、流産を誘発したり、恐怖・悲嘆・迷妄・消沈・妄語を生ぜしめ、生命（プラーナ）を閉塞させる。」

kupitastu khalu śarīre śarīraṃ nānāvidhair-  
 vikārairupatapati balavarṇasukhāyūṣām  
 upaghātāya, mano vyāharṣayati,  
 sarvendriyānyupahanti, vinihanti garbhān  
 vikṛtimāpādayatyatikālaṃ vā dhārayati,  
 bhayaṣokamohadainyātipralāpāñjanayati,  
 prāṇāṃścoparuṇaddhi/ <sup>4)</sup>

ここでは、体内で激化した風が、マナスを混乱させ、感官を阻害し、また、身体的、精神的病いの原因となるとされている。

また、自然界での風の働きについても、次のように言及している。

「正常な状態で〔自然の〕世界において運動している風は、次のような働きをする。すなわち、大地を支え、火の燃焼を盛んにし、太陽・月・星宿・惑星の恒常な運行を設定し、雲を生じ、雨を降らせ、川の流れを促し、花を開かせ実を結ばせ、萌え出でるものを発芽させ、季節を分け、元素に様々な形をとらせ、元素の量と形状を顕現させ、種子を発芽させ、穀物を成長させ、湿潤を防ぎ、乾燥させ、形状の定まっていないものに形状を賦与する。」

prakṛtibhūtasya khalvasya loke carataḥ  
 karmāṇīmāni bhavanti; tadyathā-dharaṇi-  
 dharāṇaṃ jvalanojjvālanam, ādityacandra-  
 nakṣatragrahaṇānām santāna-  
 gatividhānaṃ, sṛṣṭīśca meghānām, apām  
 visargaḥ, pravartanaṃ srotasām,  
 puṣpaphalānām cābhinirvartanam,  
 udbhedanaṃ caudbhidānām, ṛtūnām  
 pravibhāgaḥ, vibhāgo dhātūnām dhātumāna-  
 saṃsthānavyaktiḥ, bijābhisaṃskāraḥ,  
 śasyābhivardhanamavikledopaśoṣaṇe,  
 avaikārikavikāraśceti/ <sup>5)</sup>

ここでは、風が正常な状態の場合の自然界での働きについて述べられている。その時、風は大地を支えるものであり、太陽や月、星の運行を含め、宇宙の運動変化、植物の生長や季節等の自然現象は風の働き

であるとされている。

次に、自然界での、風が激昂した場合の働きについて述べられている。

「実に、この風は激昂した状態で〔自然の〕世界において運動すると、次のような作用がある。すなわち、山の頂上を揺り動かせ、樹木を根こそぎにし、海洋を波立たせ、湖水を氾濫させ、河を逆流させ、大地を揺り動かせ、雨雲を膨張させ、霧・雷鳴・砂塵・砂礫・魚・蛙・蛇・灰燼・血・石・電光を生ずる。また六季節を破壊し、作物の不作をもたらし、生物に疫病を生じ、生類を滅亡させ、四つのユガの終末をもたらし、雲と太陽と風を生み出す。」

prakupitasya kalvasya lokeṣu carataḥ  
karmāṇīmāni bhavanti; tadyathā-sikhari-  
sikharāvamathanam, unmathanamanokahānām  
utpīḍanaṃ sāgarāṇām, udvartanaṃ sarasāṃ,  
pratisaraṇamāpagānām, ākampanaṃ ca  
bhūmeḥ, ādhamanamambudānām, nīhāra-  
nīhrādapāṃśusikatāmatsyabhekoragakṣāra-  
rudhirāśmāsanivisargaḥ, vyāpādanaṃ ca  
ṣaṇṇāmṛtūnām, śasyānāmasaṅghātaḥ, bhūtānām  
copasargaḥ, bhāvānām cābhāvakaraṇaṃ,  
caturyugāntakarāṇām meghasūryānalāni-  
lānām visargaḥ/ <sup>6)</sup>

ここでは、激昂した状態の風の作用について述べられている。その時、風は、大地を揺るがし、嵐を呼び、生物に疫病をもたらし、滅亡させるとされる。

最後に、風と医者との関係について次のように述べられている。

「もし風がきわめて強力で激しく迅速な作用をし、緊急の対応を要するものであるということを知らなければ、突然激化した風に対応しなければならない医者は、どうして最初に死のおそれから〔患者を〕救うべく、前もってその風をおさえておくことができようか。また風をしかるべく賞賛することも、体力や容色の増進のため精力の増強と蓄積のため、知力の発揮のため、さらには寿命を最高度へのばすために役立つのである。」

bhīṣak pavanamatībalamatiparuṣamati-  
śīgrakāriṇamātyayikaṃ cennānuniśamyet,  
sahasā prakupitamatiprayataḥ katham  
agre, abhirakṣitumabhidhāsyati prāg  
evainamatyayabhayāt; vāyoryathārhā  
stutīrapi bhavatyārogyāya balavarṇa-  
vivṛddhaye varcasvitvāyopacayāya  
jñānopapattaye paramāyuhprakarṣāya ceti  
//10// <sup>7)</sup>

ここでは、医学的な観点から、風について述べられている。医者は突然激化した風に対応しなければならない。また風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役立つとされる。医者は、風を、特に病気等の原因となる激化した風について知り、緊急に対応すべきものであると考えられていたようである。

## 小 結

上記の検討から、次のようなことが知られた。まず、風を表す言葉として、ヴァータが使われており、身体中のヴァータは、乾燥・軽さ・冷たさ・激しさ・清さ・荒さ・空洞性をもたらすものによって増大し、湿り・重さ・温・滑らかさ・軟・密集性をもたらすものによって減少する。つまり、ヴァータは身体中で、

増加したり減少したりするものである。

また、ヴァータではなく、同じく風を意味するヴァーユという言葉が使われて、それが、プラーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナの五種からなり、身体を保持するものとされている。そして、この風が正常な状態にある場合には、それはマナスを制御し、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体の方へ運ぶ。さらに、風は身体組織の様々な機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命持続の原因とされる。また、風が体内で激化した場合には、マナスを混乱させ、感官を阻害し、また、身体的、精神的病いの原因となるとされている。

次に、風が正常な状態の場合の自然界での働きについては、その時、風は大地を支えるものであり、太陽や月、星の運行を含め、宇宙の運動変化、植物の生長や季節等の自然現象は風の働きであるとされている。また、風が激昂した状態の場合の作用については、その時、風は、大地を揺るがし、嵐を呼び、生物に疫病をもたらし、滅亡させるとされる。

最後に、医学的な観点からの、風についての言及がある。すなわち、医者は突然激化した風に対応しなければならない。また風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役立つとされる。医者は、風を、特に病気等の原因となる激化した風について知り、緊急に対応すべきものであると考えられていたようである。

## 2. チャラカ・サンヒターのプラーナ説とシャンカラの見解との比較検討

ここからは、シャンカラの見解と、チャラカ・サンヒターのプラーナ説を比較検討していきたい。まず、シャンカラは、プラーナが風（ヴァーユ）でもなく、所作でもないと言くブラフマストラ（BS）を引用し<sup>8)</sup>、これに続けてプラーナの本性を述べている<sup>9)</sup>。そこでこのシャンカラの説明によれば<sup>10)</sup>、まず、敵論者の説が述べられ、それによると、聖典ではプラーナは風の一つであり、サーンクヤ学派においてもプラーナを初めとする五風は作具の共通する機能とされる。この敵論者の見解に対してヴェーダーンタ派の反論が述べられる<sup>11)</sup>。すなわち、ここでは、風とは別に聖典に教示されているので、プラーナ等の五風は風ではなく、また、作具はそれぞれに各自の機能を持っており、それらの集合が独立の作用をすることはないので、五風は全ての作具に共通する機能ではないとされている。このように、シャンカラはすべての作具に共通する機能を否定している。

一方、チャラカ・サンヒターでは風（ヴァーユ）は、プラーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナの五種からなり、身体を保持するものとされている。このようにチャラカ・サンヒターでは、明らかに、プラーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナの五種は風である。さらに、チャラカ・サンヒターではこの風が正常な状態にある場合には、それはマナスを制御し、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体の方へ運ぶとされている。これはすべての作具に風が共通に機能することを示しており、五風は全ての作具に共通する機能ではないというシャンカラの説と異なっている。

また、シャンカラは次のような見解を示している。すなわち、上記のヴェーダーンタ学派の反論の部分に対する論者の反駁が想定されている<sup>12)</sup>。その中で、敵論者からの、聖典でプラーナは風なりとあるではないか、という反駁に、ヴェーダーンタ派が答えている。シャンカラによると、プラーナは風が自己の中に入って、五つに分れ、それぞれが特殊の性質で存在している時に、プラーナと呼ばれるのであるから、風とは全く別の存在でもなく、風そのものでもない。この理由から、聖典に風とプラーナを区別していないものがあっても矛盾はないとする。

チャラカ・サンヒターには、風とプラーナが別であるという言及は見られない。むしろ、風（ヴァーユ）は、プラーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナの五種からなるとしており、明らかにプラーナ等の五風は風である。

さらにシャンカラの見解を見ると、想定する敵論者の反論が続く<sup>13)</sup>。ここでは、発声器官等の感官がプラーナに従属しているから、プラーナには命我のように独立性があるのではないかという敵論者の見解が述べられている。これに対して、次のように反論している<sup>14)</sup>。すなわち、プラーナは独立ではない。なぜならそれは眼等の感官と同じであるからとするBSの言及が示される。この部分に続くシャンカラの注釈

では次のように説明している<sup>15)</sup>。すなわち、プラーナは独自性を持たない眼等と共に教えられており、共に教えられるものは同じ性質を持つものであるから、プラーナも独自性を持たないとされる。また、シャンカラによれば、プラーナは部分の集合であり、非知性のものであること等も、それが独立でないことの原因であるとされている。

このシャンカラの説に敵論者は次のように反論する<sup>16)</sup>。すなわち、もし眼等と同じであるなら、プラーナも命我の作具であり、眼等と同じように認識対象が付随して生じるはずだと言う。しかし、眼等十一以外にそのようなものは認められないから、プラーナが眼等と同じ十二番目の作具とは考えられないと言う。

これに対して、またヴェーダーンタ派の見解が述べられる。まず、BSが引用され<sup>17)</sup> プラーナは聖典が示す如く、作具ではないと言うBSの言及が示される。これに続けてシャンカラは次のように説明している<sup>18)</sup>。まず、眼等のように対象を持つ器官ではないから、その意味でプラーナは作具ではないと言う。プラーナと眼等の器官との違いは、たとえば発声器官等が出て行っても、ただその機能が欠けるだけで、前と同じように生命が持続されるが、プラーナが出て行こうとしたときに、発声器官等が衰弱に陥り、身体の崩壊が伴うから、身体と感官の存立がプラーナに基づくことを聖典が明示していると言う。ここでは、プラーナは身体と感官の存立に決定的な影響を持つ重要な存在であると言われている。

チャラカ・サンヒターでは、風はマナスを制御し、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体の方へ運ぶとされる。ここでは、作具という言葉は用いられていないが、感覚の対象を認識主体に運ぶ働きは認めている。さらに、チャラカ・サンヒターでは、風は身体の組織の様々な機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命持続の原因とされる。シャンカラにおいても、病気という表現はないが、プラーナは身体と感官の存立に決定的な影響を持つ重要な存在であり、この点は一致している。

## 結 論

上記のチャラカ・サンヒターの見解とシャンカラ説の比較検討によって、次のようなことが知られた。すなわち、チャラカ・サンヒターでは、風が正常な状態にある場合に、マナスを制御し、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体の方へ運ぶとされている。これはマナス等のすべての作具に、風が共通に働くことを示しており、五風は全ての作具に共通する機能ではないというシャンカラ説と異なっている。

また、シャンカラによると、プラーナは風が自己の中に入って、五つに分れ、それぞれが特殊の性質で存在している時に、プラーナと呼ばれるのであるから、風とは全く別の存在でもなく、風そのものでもないとされている。一方、チャラカ・サンヒターには、風とプラーナが別であるという言及は見られない。むしろ、プラーナ等の五風は風である。

さらに、チャラカ・サンヒターでは、風はマナスを制御し、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体の方へ運ぶとされる。ここでは、作具という言葉は用いられていないが、感覚の対象を認識主体に運ぶ働きは認めている。また、チャラカ・サンヒターでは、風は身体の組織の様々な機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命持続の原因とされる。シャンカラにおいても、病気という表現はないが、プラーナは身体と感官の存立に決定的な影響を持つ重要な存在であり、この点のみ一致している。

このように、チャラカ・サンヒターの見解とシャンカラ説には、風が身体にとって重要な存在であるという共通点はあるが、むしろ相違点のほうが目立つようである。これは、チャラカ・サンヒターが医学書であり、風についての言及が、より自然科学的、または医学的な見地から語られていることに起因しているとも考えられる。

## 摘 要

チャラカ・サンヒターのプラーナ説とシャンカラの見解の共通点は、プラーナ等の五風が身体にとって重要な存在であるという点である。その他の問題点、すなわち、五風をすべての作具に共通する機能と認めるか否かや、プラーナと風を別と考えるか否かという点では、異なった見解が示されている。また、チ

チャラカ・サンヒターでは、プラーナ等の五風についての言及が、より自然科学的、または医学的であり、それが特色でもある。

## 注 記

- 1) 拙稿「シャーンカラバーシュヤのマナス説—プラーナ説との比較考察—」南九州大学研究報告 人文社会科学編第36号 (B) pp.11-23 2006.4.
- 2) Carakasamhitā (以下CS) ed by V. Bh. Sharma, Chowkhamba Sanskrit Studies, VOL. XCIV. Vol. I., p.236, ll.10-16. 矢野道雄『インド医学概論』(科学の名著第Ⅱ期)昭和63年 春秋社p.84参照
- 3) CS, p.237, ll.15-20 矢野上掲書p.85参照.
- 4) CS, p.237, l.35-P.238, l.3 矢野上掲書p.86参照.
- 5) CS, p.238, ll.11-15 矢野上掲書P.86参照.
- 6) CS, p.238, ll.28-33 矢野上掲書p.86参照.
- 7) CS, p.240, ll.20-23 矢野上掲書p.87参照.
- 8) Brahmasūtra (以下SBh) : Brahmasutra Sankara Bhasya ed. by K. L. Joshi. Parimal Publicatuions 1996 (以下T1)., Brahmasutra, Lalitasamskaranam with Sankarabhasya, ed. by M. M. Isvara. 2vols. Sri Kailasa Vidya Pra / Pisikes 2002 (以下T2), T1を底本としT2を補完本として用いた.  
SBh. vol. II, p.639 l.1 (T1); vol. II, p.604 l.4 (T2) 金倉圓照『シャンカラの哲学 (下)』昭和59年 春秋社p.120参照 長友上掲論文p.12, ll.3-4参照.
- 9) SBh. vol. II, p.639 l.2 (T1); vol. II, p.604 ll.5-6 (T2) 金倉『シャンカラの哲学 (下)』 p.120参照 長友上掲論文p.12, ll.7-9参照.
- 10) SBh. vol. II, p.639 ll.2-5 (T1); vol. II, p.604 ll.6-9 (T2) 金倉『シャンカラの哲学 (下)』 p.120参照 長友上掲論文p.12, ll.11-27参照.
- 11) SBh. vol. II, p.639 l.5~p.640 l.5 (T1); vol. II, p.604 l.9~ p.605 l.7 (T2)  
金倉『シャンカラの哲学 (下)』 pp.120-121参照 長友上掲論文p.12, l.31~p.13, l.22参照.
- 12) SBh. vol. II, p.640 ll.12-14 (T1); vol. II, p.606 ll.1-4 (T2) 金倉『シャンカラの哲学 (下)』  
pp.122参照 長友上掲論文p.13, ll.27-40参照.
- 13) SBh. vol. II, p.640 ll.14-18 (T1); vol. II, p.606 ll.4-8 (T2) 金倉『シャンカラの哲学 (下)』  
pp.122-123参照 長友上掲論文p.14, ll.2-21参照.
- 14) SBh. vol. II, p.640 l.18~p.641 l.1 (T1); vol. II, p.606 l.10 (T2) 金倉『シャンカラの哲学 (下)』 p.123  
参照 長友上掲論文p.14, ll.25-27参照.
- 15) SBh. vol. II, p.641 ll.2-6 (T1); vol. II, p.606 l.11~p.607 l.3 (T2) 金倉『シャンカラの哲学 (下)』  
p.123参照 長友上掲論文p.14, l.30~p.15, l.8参照.
- 16) SBh. vol. II, p.641 ll.6-10 (T1); vol. II, p.607 ll.4-8 (T2) 金倉『シャンカラの哲学 (下)』 p.124参照  
長友上掲論文p.15, ll.14-30参照.
- 17) SBh. vol. II, p.641, ll.10-11 (T1); vol. II, p.607 ll.8-9 (T2) 金倉『シャンカラの哲学 (下)』  
p.124参照 長友上掲論文p.15, ll.35-39参照.
- 18) SBh. vol. II, p.641, ll.12-18 (T1); vol. II, p.607 ll.10~p.608 l.4 (T2) 金倉『シャンカラの哲学 (下)』  
pp.124-125参照 長友上掲論文p.15, ll.41~p.16. l.24 参照.